本研究では「自我体験」について、それまで素朴に一体であった私と世界の自明性が失われ、「私について問うことのできる私」が誕生する体験として捉えた。そして、数量的調査などによって体験を対象化して客観的に定義するのではなく、体験者自身の語りの中にいかに体験が描写されるのか、そのディテールや体験の主観的・個別的側面に注目して検討することを試みた。また、自我体験の大きな特徴として、それまでの自明性を失うという分離・喪失の側面と、独立した個として誕生し、新しく世界とつながるという主体の確立の側面という両義的な性質を有すると考え、それぞれを自我体験の「へだたり」と「つながり」として検討した。さらに、自我体験において、「他者」の存在はどのように現われてくるのか考察することも試みた。

第 1 章では、自我体験研究の歴史を概観し、自我体験が長らく心理学の研究対象となってこなかった現状と、その背景として、主観的体験である自我体験を研究とすることの難しさについて考察した。

第 2 章では、自我体験が体験者にとっていかなる体験であり、その生の中にどのように位置づけられているのかについて、PAC 分析を応用した半構造化面接から考察した。自我体験の多くは、長らく口にすることもできないような不安や混乱、苦しみを体験者にもたらす一方、自分の世界を広げるような体験として想起されたり、その後の人生にとって意味のあるものとしても語られたりするという、両価的側面を持つことが明らかとなった。

第 3 章では、自我体験と身体の関係について考察し、自我体験がいかに身体の次元を巻き込み、生々しく体験者に訪れるものであるかが示された。また、調査事例の検討から、自我体験が「私」と「私の身体」の分裂を生み、身体の有する他者性を突きつけてくるが、分裂し対象化された身体をもう一度「私の身体」と呼ぶことで、その分裂を内包した主体が新たに誕生することが示唆された。

第 4 章では、自我体験の語りの場について更に焦点を当てるため、筆者が自分の自我体験を語り、そこからの連想で被面接者が語るという面接調査を実施した。「つながり」と「へだたり」という視点から被面接者らの語りを分析し、「体験とのつながり/へだたり」、「他者・世界とのつながり/へだたり」、「調査者とのつながり/へだたり」という三種の指標を得た。いずれの指標においても、「つながり」と「へだたり」が同時に語られるという両義的なダイナミズムが生じており、「調査者とのつながり/へだたり」では、筆者の語りに共鳴した被面接者らが、筆者の体験と一体化したような「つながり」を示すが、被面接者自身の「私の体験」を語るために、筆者の体験と「私の体験」の差異を述べ、語る側の当事者として

現前する様子が明らかとなった。それは同時に、筆者が被面接者の前に、「他者」として現れた瞬間でもあると考えられた。

第 5 章では自我体験の語りにおける「懐かしさ」について検討し、過ぎ去った過去に対する素朴な懐かしさの場合もあれば、自我体験以前の、自他未分化な世界への郷愁――ノスタルジーと捉えられる場合もあることが示された。独立した個として生きることは、このようなノスタルジーと共に孤独を抱えることであり、そうした孤独を他者もまた抱えていると気づいた時、その孤独という「へだたり」において私と他者が「つながる」という、パラドキシカルな出会いが生じると考えられた。

終章では総合的な考察を行うと共に、心理臨床との関連から本研究で明らかになったことを振り返り、今後の自我体験研究の展望について検討した。